

# ピンイン表記に関する一考察

－軽声と「分かち書き」を中心として－

小川郁夫

## 1. はじめに

筆者は小川郁夫1994, 1999, 2000において、中国で1988年に発表された《汉语拼音正词法基本规则》<sup>1)</sup>に基づいて中国語のピンイン表記についての考察を行った。また、小川2003, 2004, 2006において、軽声の規範化及びピンイン表記に関する考察を行った。

《現代汉语词典》<sup>2)</sup>の軽声表示法には次の2種類がある。

(a) 桌子 zhuō · zi                      (b) 因为 yīn · wèi

(a) の“·zi”の部分は必ず軽声で発音するものであり、本稿ではこのような軽声を絶対的軽声と呼ぶ。(b) の“·wèi”の部分は軽声で発音してもよいし、原調（この場合は第4声）で発音してもよいものであり、本稿ではこのような軽声を任意的軽声と呼ぶ。

「彼は来ました」を意味する中国語を漢字とピンインで表記すると次のようになる。

他来了。 Tā lái le.

中国語を漢字で表記する場合は、漢字を1文字ずつ原稿用紙のます目に埋めるように書けばよい。しかし、ピンイン表記する場合は「分かち書き」しなければならない。読みやすくするためである。“了·le”は絶対的軽声語である。

しかし、「彼は来ていません」を意味する中国語を漢字とピンインで表記すると、ピンイン表記に関しては次のような2通りがありうる。何故なら、“没有 méi · yǒu”が任意的軽声語だからである。

他没有来。 Tā méiyǒu lái. または Tā méiyǒu lái.

中国語のテキストなどでピンイン表記を示す場合、“méi · yǒu”のような表記を用いるのは学習者に不親切である。任意的軽声は軽声または非軽声のどちらかに決めてピンイン表記した方が読みやすい。

大学入試センター試験の「外国語」試験に、平成9年(1997年)度から「中国語」が加わった。最初の年度は本試験・追試験ともに漢字表記のみによる出題であったが、平成

10年（1998年）度から一部ピンイン表記による出題が始まり、平成23年（2011年）度に至るまでピンイン重視の傾向が強まっている。発音教育を重視し、発音から意味を理解する能力を測るための作問工夫であると考えられるが、中国語の各種試験でピンインを用いた出題をする場合、受験者に読みやすい統一的なピンイン表記が求められる。

本稿では、センター試験「中国語」に用いられたピンイン表記も参考にしながら、任意的軽声自体のピンイン表記、及び任意的軽声を含むフレーズのピンイン表記における「分かち書き」等について若干の考察を行う。

## 2. 語における任意的軽声

2005年に発行された《現代汉语词典》第5版は第3版・第4版に比べ、軽声語の規範化が進んでいる。その例としてみず次のものが挙げられる。

这里 zhè · lǐ          那里 nà · lǐ          哪里 nǎ · lǐ

これらは場所を表す代詞であり、中国語教育の初期の段階で必ず取り上げられる最重要語である。以前の《現代汉语词典》では、このうち“这里 zhèlǐ”だけを非軽声語とし、“那里 nà · lǐ”“哪里 nǎ · lǐ”の2つを絶対的軽声語としていた。中国語のテキストでは、“这里”も含めて3つすべてを絶対的軽声語として提示するものが多い。以前の《現代汉语词典》に基づいて“这里”だけを非軽声語として学習者に提示すれば混乱を招く。幸いなことに、《現代汉语词典》第5版では、“这里”“那里”“哪里”すべてを絶対的軽声語として提示してもよいし、あるいはすべてを非軽声語として提示してもよくなった。

ところで、絶対的軽声語として示された“哪里 nǎlǐ”の実際の発音は“nǎli”である。“里”が第3声としての力を失っておらず、直前の第3声を第2声に変調させるからである。これまで、“哪里 nǎlǐ”の発音を学習者に理解させるためには、以上のような説明をする必要があった。《現代汉语词典》第5版によれば、“这里”“那里”“哪里”すべてを非軽声語として提示してもよいわけであるから、“zhèlǐ”“nǎlǐ”“nǎli”というピンイン表記を用いるテキストが現れてもよい。これらの“里”を強く発音したからといって、意味が通じなかったり、非常に不自然になるわけでもない。また、“哪里 nǎlǐ”の発音について学習者は第3声の連続による変調に注意するだけでよくなる。

そのほか、《現代汉语词典》第5版で軽声語の規範化が進んだ例として、次の方位詞が挙げられる。

上面 shàng · miàn          下面 xià · miàn          前面 qián · miàn

后面 hòu · miàn	里面 lǐ · miàn	外面 wài · miàn
东面 dōng · miàn	南面 nán · miàn	西面 xī · miàn
北面 běi · miàn	左面 zuǒ · miàn	右面 yòu · miàn

以前の《現代漢語詞典》では、上に挙げた語のうち“上面”“下面”“前面”“后面”“外面”を絶対的軽声語とし、その他のものを非軽声語としていた<sup>3)</sup>。学習者が方位詞“…面”を学ぶときに絶対的軽声と非軽声が混在していると、混乱を招く。

《現代漢語詞典》第5版によれば、方位詞“…面”すべてを絶対的軽声語として提示してもよいし、あるいはすべてを非軽声語として提示してもよくなった。筆者は小川1998, 2006で「普通話」における軽声語の減少傾向を指摘した<sup>4)</sup>。また、初級レベルの学習者に対して過度に軽声を提示すると、正確な声調の組合せを把握しにくくなる恐れがあると考ええる。テキストなどでは、これらの方位詞“…面”をすべて非軽声語として提示するのがよい。実際に“面”を強く発音しても不自然ではない。

センター試験「中国語」で出題された任意的軽声語のピンイン表記には次のものがある。←の右に示したのは《現代漢語詞典》第5版のピンイン表記と漢字表記である<sup>5)</sup>。

dāsuan ← dǎ · suàn (打算)	fǎnzhèng ← fǎn · zhèng (反正)
jīhuì ← jī · huì (机会)	kànjiàn ← kàn · jiàn (看见)
lǎoshì ← lǎo · shì (老是)	máobìng ← máo · bìng (毛病)
méiyǒu ← méi · yǒu (没有)	xīnxiān ← xīn · xiān (新鲜)
yìjiàn ← yì · jiàn (意见)	yuēhuì ← yuē · huì (约会)
zuòwèi ← zuò · wèi (座位)	guānxi ← guān · xi (关系)
nǎlǐ ← nǎ · lǐ (哪里)	
yuànyì または yuànyì ← yuàn · yì (愿意)	
zhīdào または zhīdào ← zhī · dào (知道)	

“愿意”と“知道”は非軽声と軽声の2通りで出題されている。それを除けば、センター試験「中国語」で出題された任意的軽声語では、“关系”“哪里”が軽声語として示されているだけである。筆者は“愿意”の“意”と“知道”の“道”を強く発音しても不自然だとは思わない。テキストや試験問題で任意的軽声語のピンイン表記を示す場合、過度に軽声であることを強調する必要はないと考える。その漢字の本来の声調が分かるピンイン表記を用いる方が意味を理解しやすいものになる。教育の場では、教授者が軽声で発音すべきだと思うものがあれば、軽く発音してもよいという説明を加えればよい。

### 3. フレーズにおける任意的轻声

《汉语拼音正词法基本规则》はピンイン表記に関する原則的な規則であり、実際に運用してみると不明な点が多く出てくる。この規則は主としてピンイン表記における「分かち書き」の方法を示したもので、フレーズにおける轻声と非轻声の示し方については、更に不明な点が多い。以下では、動詞の重ね型、「名詞+1音節方位詞」、補語を含むフレーズのピンイン表記について考察する。

動詞の重ね型に関して、《汉语拼音正词法基本规则》では次の例を挙げている。

kànkàn (看看)                      yánjiū yánjiū (研究研究)

“看看”のピンイン表記は「続け書き」して、後ろの“看”を轻声で示している。このピンイン表記は“爸爸 bàba”“星星 xīngxīng”などの重ね型の名詞と見た目の上での整合性を持ち、中国語のピンイン表記としてまったく抵抗を感じない。“看看”のピンイン表記に従えば、“研究研究”は“yánjiūyánjiū”とピンイン表記されることになるが、《汉语拼音正词法基本规则》では文法構造よりも、ピンイン表記としての読みやすさを優先し、1音節動詞の重ね型は「続け書き」し、2音節動詞の重ね型は「分かち書き」している。“研究研究”では後ろの“研究”の声調を原調で示しているが、これをその通りに強く発音しても不自然ではない。筆者は“研究研究”を“yánjiūyánjiū”というピンイン表記で学んだが、後ろの“研究”全体を轻声で発音することに対して違和感を覚えた。2音節動詞の重ね型のピンイン表記は《汉语拼音正词法基本规则》に従うのがよい。

センター試験「中国語」で出題された動詞の重ね型のピンイン表記には次のものがある。2音節動詞の重ね型は出題されたことがない。

kànkàn (看看)                      zhǎozhao (找找)

kàn yí kàn (看一看)              tāile tái (抬了抬)

“看一看”は動詞の重ね型の中間に“一”を入れたものであるが、ピンイン表記では3つの部分をすべて「分かち書き」し、非轻声で示している。“抬了抬”は前の“抬”に“了”が付いたものであるが、ピンイン表記では“抬”と“了”を「続け書き」し、後ろの“抬”を非轻声で示している。これらのピンイン表記は非常に読みやすいものである。

「名詞+1音節方位詞」に関して、《汉语拼音正词法基本规则》では次の例を挙げているが、名詞と方位詞に「分かち書き」して、方位詞“里”のみを轻声で示している。

shān shàng (山上)      shù xià (树下)      mén wài (门外)  
hé li (河里)      dàjiē shàng (大街上)      shāngdiàn li (商店里)

センター試験「中国語」で出題された「名詞+1音節方位詞」のピンイン表記には次のものがあるが、名詞と方位詞を「続け書き」するものと「分かち書き」するものの両方がある。また、方位詞の部分はすべて軽声で示している。

shūjiàshàng (书架上)      zhuōzi shàng (桌子上)      jiérì li (节日里)  
shēnshàng (身上)      tóu shàng (头上)      jiāli (家里)  
wūli (屋里)      xīnli (心里)      yǎnli (眼里)

「2音節名詞+1音節方位詞」の“书架上”と“桌子上”“节日里”のピンイン表記を比較してみると、「分かち書き」した方が読みやすい。一方、「1音節名詞+1音節方位詞」のピンイン表記は「続け書き」しても見た目の不自然さはない。また、“身上 shēnshàng” “心里 xīnli” のように《現代汉语词典》に1語の絶対的軽声語として収録されているものもある。「名詞+方位詞」のピンイン表記は、名詞と方位詞がともに1音節の場合は「続け書き」し、その他の場合は「分かち書き」という方法を用いてもよいと考える。《汉语拼音正词法基本规则》に挙げられた“山上”“门外”を“shānshàng”“ménwài”とピンイン表記しても不自然ではない。ただし、1音節方位詞を軽声で示すか否かについては、すべて原調で示すか、あるいは“里”のみ軽声で示してもよいのではないか。すでに挙げた“这里”“那里”“哪里”の“里”を軽声で示すか否かとの整合性も考慮すべきである。

補語は大きく結果補語、方向補語、状態補語、可能補語の4種類に分けられる。

《汉语拼音正词法基本规则》では補語を含む「1音節+1音節」のフレーズについては「続け書き」し、その他の場合は「分かち書き」としている。センター試験「中国語」で出題された結果補語には次のものがあり、「1音節+1音節」のものについてはまったく問題がない<sup>6)</sup>。また、結果補語の部分のピンインはすべて原調で示している。

zuòhǎo (做好)      zhǎngdà (长大)      wèn cuò (问错)  
kàndào (看到)      dǎtīng duì (打听对)      zhùyìdào (注意到)

「2音節+1音節」の“打听对”は「分かち書き」している。“打听”は絶対的軽声語である。最後の“注意到”は“zhùyì dào”と「分かち書き」すべきであり、またその方が読みやすい。

方向補語を含むフレーズの場合も「1音節+1音節」は「続け書き」し、その他の場合は「分かち書き」すればよい。しかし、方向補語の部分を軽声で示すか非軽声で示すかは

非常に難しい問題である。《汉语拼音正词法基本规则》は次の例を挙げている。

zǒulái (走来)

zǒu jìnlái (走进来)

前者の“来”は“走”の方向補語であるが、“来”を原調で示している。筆者はかつてこのような“来”を轻声として学んだ。後者は“进来”が“走”の複合方向補語であるが、“进来”全体を轻声で示している。筆者はこのような例も轻声として学んだが、2音節の“进来”全体を轻声で発音することに対して違和感を覚えた。

センター試験「中国語」で出題された方向補語“…来”“…去”のピンイン表記には次のものがある。

guòlái (过来)

huílái (回来)

tīnglái (听来)

xiàqu (下去)

tiāo lái tiāo qù (挑来挑去)

zǒulái zǒuqù (走来走去)

以上のように“来”“去”のピンインを原調で示すものと轻声で示すものが混在している。また、“挑来挑去”を4つの部分に「分かち書き」するのには表記としての不自然さを感じる。その他、センター試験の「中国語」で出題された方向補語を含むフレーズで「1音節+1音節」のもののピンイン表記には次のものがある。

chuānshàng (穿上)

shèngxià (剩下)

shuōqǐ (说起)

kǎoshàng または kǎoshàng (考上)

ここでもやはり方向補語の部分で原調で示すものと轻声で示すものが混在している。1音節方向補語には“上”“下”“进”“出”“回”“过”“起”“开”があるが、これらのピンイン表記はすべて原調で示すのが適当である。それで読みにくいことはなく、またゆっくり発音すれば原調が現れるはずである<sup>7)</sup>。さらに、「名詞+1音節方位詞」に挙げた“山上”“树下”などと整合性を持たせることもできる。

複合方向補語には“上来”“上去”“下来”“下去”“进来”“进去”“出来”“出去”“回来”“回去”“过来”“过去”“起来”“开来”があるが、センター試験「中国語」で出題された複合方向補語のピンイン表記には次のものがある。

kànshàngqu (看上去)

kànchulai (看出来)

táijìnqu (抬进去)

náguolai (拿过来)

zǒuqǐlai (走起来)

zuòqǐlai (做起来)

ここに挙げたのはすべて「1音節+2音節」の例であるが、《汉语拼音正词法基本规则》ではこれらのピンイン表記を「分かち書き」としている。しかし、センター試験「中

国語]ではすべて「続け書き」している。また、複合方向補語の第1音節を原調で示すものと軽声で示すものが混在している。上で1音節方向補語のピンインを原調で示すことを提案したが、複合方向補語の場合も同様にすべて原調で示しても別に問題はないと考える。次のようなピンイン表記の方が読みやすい。

kàn shàngqù (看上去)	kàn chūlái (看出来)
tái jìnqù (抬进去)	ná guòlái (拿过来)
zǒu qǐlái (走起来)	zuò qǐlái (做起来)

また、センター試験「中国語」では次のような方向補語のピンイン表記も出題されているが、これは「分かち書き」を含めて非常に読みやすいものである。

tiàole qǐlái (跳了起来)	pǎole chūlái (跑了出来)
zǒule chūlái (走了出来)	tiāochū … lái (挑出…来)

“得”を用いる補語には状態補語と可能補語があるが、センター試験「中国語」では状態補語の“得”をその前の動詞と「続け書き」している。

bìngde kě zhòng (病得可重)	dǎbande zhème piàoliang (打扮得这么漂亮)
fàngde tài duō (放得太多)	xiǎngde dào jiǎndān (想得倒简单)

《汉语拼音正词法基本规则》では、構造助詞“的”“得”“地”は「分かち書き」としている。状態補語の場合も“bing de ke zhong”のように「分かち書き」しても問題はない。ただ、次の可能補語を取り上げる所で述べるが、“得 de”をその前の動詞と「続け書き」することで状態補語であることを示すという効果がないわけではない。

“得 de”は可能補語でも使う。否定形にする場合は“得 de”を“不 bu”に置き換える。《汉语拼音正词法基本规则》では“对不起”“吃得消”のピンイン表記を「あるまとまった概念を表す3音節の構造」として，“duibuqi”“chidexiao”と「続け書き」している。センター試験「中国語」で出題された同様の例に“laideji (来得及)”“laibuji (来不及)”がある。しかし、可能補語を含むフレーズには「あるまとまった概念」かどうか判断し難いものが非常に多い。センター試験「中国語」で出題された可能補語を含むフレーズには次のものがある。

bāngdeshàng (帮得上)	chibuliǎo (吃不了)
fàngbuxià (放不下)	fēnbuchū (分不出)
kāibukāi (开不开)	shuōbuguò (说不过)
tándelái (谈得来)	xuédehǎo (学得好)
yòngbuzháo (用不着)	zuòbuhǎo (做不好)

ここではすべて「続け書き」している。“得 de” “不 bu” は軽声であり、またその他の部分が軽声か非軽声かという問題もない。可能補語を含むフレーズは「あるまとまった概念」であるかどうかは別にして、構造的にひとかたまりである。センター試験「中国語」で用いているピンイン表記は適当であると考える。

また、センター試験「中国語」では次のようなピンイン表記も出題されている。

fāhuìbùliǎo (发挥不了)	kàndeqīngchū (看得清楚)
mángbùguòlái (忙不过来)	chībùxiàqù (吃不下去)
tīngbùjìnqù (听不进去)	wènchū shénme lái (问不出什么来)

最初の“发挥不了”は2音節動詞を用いた例である。“看得清楚”は補語の部分に2音節形容詞“清楚”が用いられたものであるが、“清楚”は絶対的軽声語である。“忙不过来”は可能補語の部分に方向補語が用いられたものであるが、“不”以外はすべて原調でピンイン表記されている。“吃不下去” “听不进去”は“忙不过来”と同様の例であるが、やはり最後の“去”も原調でピンイン表記した方が統一的なものになる。最後の例は“问不出来”の“问不出”と“来”の間に目的語“什么”が入り込んだ形になっているが、最後の“来”のピンインが原調で示されおり、フレーズ全体のピンイン表記は非常に読みやすい<sup>8)</sup>。

#### 4. その他の任意的軽声

肯定と否定を重ねた“来不来” “高兴不高兴”などの否定の部分、あるいは中間の“不”は軽声であると言う場合がある。確かに、最初の部分に比べて否定の部分や“不”は軽く発音される。しかし、ゆっくり発音すれば原調が現れるので、絶対的軽声ではない。そのような例として、センター試験「中国語」に次のようなピンイン表記が出題された。

shì bu shì (是不是)	cháng bù cháng (尝不尝)
chéng bù chéng (成不成)	máng bù máng (忙不忙)
néng bù néng (能不能)	hǎochī bù hǎochī (好吃不好吃)
shēngqì bù shēngqì (生气不生气)	xiǎngguo méi xiǎngguo (想过没想过)

“是不是”だけ中間の“不”が軽声で表記されているが、これも“shì bú shì”と表記した方が読みやすい。テキストにしばしば“shì bu shì” “shì bu shì”というピンイン表記が用いられているが、学習者にはまず原調で発音練習させ、その後で教授者が実際の発音を示せばよい。



## 5. おわりに

任意的軽声を軽声で示すか否かという問題、フレーズにおいて「分かち書き」するか「続け書き」するかという問題について考察してきたが、それは読みやすいピンイン表記を行うためである。軽声での表記をできるだけ減らし、あまりに長い「続け書き」を避けるのがよいというのが筆者の考えである。

例えば、“我想起来”という文は「私は思い出した」「私は起きたいと思った」という2つの意味を持つ。これを次のような2通りのピンインで表記すれば、意味の違いをピンイン表記に反映できるかもしれない。(a) (b) の順にそれぞれの意味を表す。

(a) Wǒ xiǎngqilai le.      または      Wǒ xiǎng qilai le.

(b) Wǒ xiǎng qilai le.      または      Wǒ xiǎng qílai le.

ピンイン表記は中国語をローマ字で表したものであり、漢字で表したものと表記方法の違い以外では等価である。“我想起来”の持つ2つの意味をピンイン表記に反映させる必要はない。そしてどちらの意味の場合も (b) の後者のピンイン表記がよいと考える。

また、“我叫他去”という文も「私は彼に行かせる」「私は彼を呼びに行く」という2つの意味を持ち、次の (c)(d) のようにピンイン表記すればその意味の違いを反映できるかもしれない。(c)(d) の順にそれぞれの意味を表す<sup>9)</sup>。

(c) Wǒ jiào tā qù.                      (d) Wǒ jiào ta qù.

しかし、テキストなどで (d) のピンイン表記を提示すると、学習者に漢字“他”の正しい発音を提示しないことになる。どちらの意味の場合も (c) のピンイン表記がよい。

状態補語の“得 de”について、センター試験「中国語」ではその前の動詞と「続け書き」するピンイン表記を用いているが、筆者はこれもその他の構造助詞「的 de」「地 de」と同様に「分かち書き」するのがよいと考える。ローマ字で表せばやはり“de”となる“得 de”を特別扱いする必要はない。しかし、可能補語の場合だけは“得 de”のほかにも“不 bu”も用いるし、また「あるまとまった概念」の判断が非常に難しいため、いまのところすべて「続け書き」するのがよいと考えている。

本来漢字で表す中国語をピンインで表記することは非常に難しい。《汉语拼音正词法基本规则》に基づきつつも、言語表記として読みやすくするために、場合によっては臨機応変な表記も認めてよいと考える。

注

- 1) 《国家语言文字政策法规汇编(1949-1995)》, 国家语言文字工作委员会政策法规室编, 语文出版社, 1996年3月。
- 2) 《现代汉语词典》第5版, 中国社会科学院语言研究所词典编辑室, 商务印书馆, 2005年6月。“凡例3.4”に“因为 yīn-wèi”の“为”は一般に轻声で発音するが、時として第4声で発音してもよい」とあるが、本稿ではこのような語を「轻声で発音してもよいし、原調で発音してもよい」と考える。《现代汉语词典》第1版は1978年発行。第2版は1983年発行。第3版は1996年発行で《修订本》と呼ばれる。第4版は2002年発行で《增补本》と呼ばれる。また、1989年発行の《补编》がある。
- 3) 実際には、第3版・第4版に“东面”“西面”“北面”は収録されていない。《补编》には“东面”が非轻声語として収録されている。
- 4) 朱宏一2008に同様の指摘がある。曹文2010“第五节(三)3”には、方位詞や方向動詞について“这类词过去一直被看做是规则的轻声词, 但近些年来它们正变得越来越‘自由’, 也越来越复杂”(この種の語はこれまでずっと規則的な轻声語と見なされてきたが、近年ますます「自由」なものに変わり、ますます複雑にもなっている)という記述がある。
- 5) “打算”は以前の《现代汉语词典》では絶対的轻声語であった。平成14年(2002年)度センター試験「中国語」の追試験で出題された時は“dāsuan”と表記されていた。ここに挙げたのは、《现代汉语词典》第5版発行後の平成22年(2010年)度の追試験で出題されたものである。“反正”は「どうせ」という意味の副詞として出題された。「正しい状態に戻る」「投降する」という意味の場合は非轻声語である。“没有”は動詞としての用法で数回出題されているが、「続け書き」と「分かち書き」の2通りのピンイン表記で出題されている。“有没有”の場合は3つの部分に「分かち書き」することも考えられるが、一般には「続け書き」すればよい。“哪里”は、《现代汉语词典》第5版発行後の平成19年(2007年)度に出題されたものであるが、轻声語として示されている。“知道”は否定の“不知道”の場合のみ非轻声語として示されている。実際に“不知道”の“道”は強く発音するが、それ以外の場合も強く発音すると不自然だというわけではないので、すべて“zhidào”と表記してもよいと考える。
- 6) 結果補語と言えるかどうかはさておき、センター試験「中国語」では“借给”“放在”なども“jiègěi”“fàngzài”のようにピンイン表記している。「続け書き」するか否か、「给」「在」を轻声で示すか否かについては別に一考を要する。

- 7) 《現代漢語八百詞(增訂本)》(現代漢語語法要點)“動趨式的輕重音”に方向補語の実際の発音について「“進”“出”“回”は文末に置かれた時は強く発音する」「“起”はあまり文末に置かれないが、文末に置かれた時は強く発音する」「“過”“開”は強く発音する」という記述がある。
- 8) 《現代漢語詞典》“凡例3.5”に「“拿得起来”“拿不起来”の“起来”の2文字はどちらも強く発音する」という記述がある。さらに「“起来”の中間に目的語を加えた“拿得起枪来”“拿不起枪来”の“起”は強く発音し、“来”は軽く発音する」という記述があるが、これは実際の発音を説明したもので、ピンイン表記としては“来”を原調で示してもかまわないと考える。
- 9) 動詞の目的語である人称代詞は轻声であると言う場合がある。《語法讲义》“第十二章12.4”に「彼を呼びに行く」という意味の“叫他去”の“去”について「後ろに置いて目的を表す“去”は轻声で発音する」という記述がある。従って、「彼を呼びに行く」という意味の“叫他去”は実際には“jiào ta qu”と発音されることになる。しかし、このピンイン表記を用いるのは学習者に不親切である。

#### 参考文献

- 曹文2010《現代漢語語音答問》，北京大學出版社。
- 呂叔湘1999《現代漢語八百詞(增訂本)》，商務印書館。
- 朱德熙1982《語法讲义》，商務印書館。
- 朱宏一2008《《現代漢語詞典》第5版轻声處理評析》，《中國語文》第6期。
- 『中國語大學入試センター試験対策問題集』平成9年度版～平成23年度版，白帝社。
- 小川郁夫1994「中國語の拼音表記について」、『名古屋大學中國語學文學論集』第七輯。
- 小川郁夫1998「《現代漢語詞典》と《現代漢語詞典修訂本》における轻声語の扱いの変化について」、『下関市立大學論集』第41卷第3号。
- 小川郁夫1999「中國語のピンイン表記に関するいくつかの問題」、『福岡國際大學紀要』第1号。
- 小川郁夫2000「中國語教育用『ピンイン正書法基本規則』」、『福岡國際大學紀要』第4号。
- 小川郁夫2003「轻声語と中國語教育」、『福岡國際大學紀要』第10号。
- 小川郁夫2004「轻声の規範化について」、『福岡國際大學紀要』第12号。
- 小川郁夫2006「《現代漢語詞典》における轻声語とアル化語」、『福岡國際大學紀要』第16号。